

# 会員の ひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

## 長歌「冠の疫出ず」

上川北部医師会  
士別市立上士別医院

たけうち みきお  
竹内 幹夫

武蔵国千代田の宮に天の下見行しし令和の天皇の  
御代庚子の歳  
冠の疫蔓て数多の屍人出にけるを詠める

たまかぎる 夕陽の彼方 茫々と 蒼き綿津見  
行き行けど 島影見えぬ 荒浪を 超えて遥かな  
西方の 唐土に到り 空数ふ 大河上りて 言喧く  
唐の国内の 武漢に 獣商ふ 市場にて 瘡癘起  
りて 屍人出で 数多の屍 累なりぬ  
唐の医師は 時措かず 瘡癘を知りて 人草の  
いのち危ぶみ 言挙げし 網絡便りて 戒めを高声  
すれども 共産の 悪しき造 謀りて 卑しき党员  
を 遣はしめ 密かにこれを 貶めぬ  
言挙げ塞りて 久しくも 瘡癘の屍人は 絶えず  
して WHOの博士ら 眉顰め 疑ふところと な  
りにけり

唐の司は あさましと 急きて市場を 閉てまつ  
る 彼の地の帝も 之を知り 郡界を 閉じたまひ  
唐の博士が 究めたる 蝙蝠の身に 潜みたる 微  
細な病毒 世に知られ 高名なれども この度は  
一切無縁と 唱えしめ 知らず顔なり 剩へ 病毒  
騒ぎは 米国の 陰謀なりと 喚きたて 世間の顰  
みと なりにけり 四方の国々 これを見て 疎ぶ  
るものを 塞やりぬと 海なる水門 のみならず  
外国よりの 久方の 空の御門も 塞やりまし 命  
の御門 閉てまつらひぬ

### 反歌二首

凶靈疾く消え去りねと祈れども吹雪に紛ふ柏手の  
音  
神業を嗤ひし人らが額寄せうち惑ひつつ薄氷を踏  
む

## 或る巡り会い

北海道大学医師会  
東栄内科クリニック

むさし まなぶ  
武蔵 学

この無常な世にあって、偶然と必然ということに想いを巡らすことが時にある。この美しい詩に巡り合えた時もそうであった。たまたまの偶然だったのだろうか？ それにしては、あまりに偶然の重なりが多くて、必然だったと思いたくなるのである。

父が入所してお世話になっていた老健でCOVID-19のクラスターが発生し、父も感染してしまった。幸い、ラゲブリオ投与ですぐに解熱してCOVID-19はクリアできたようだったが、その後、食べられなくなってしまった。面会が許されない状況で故郷から遠く離れて暮らす私にとって、老健からの電話で知らされる父の容態の変化に一喜一憂する日々が続いた。そんな折に、街の書店で『山女魚里の釣り』と題する一冊の本が目にとまり手に取った。帯には「伝説のフライフィッシャーが詩情ゆたかに語る山女魚釣りの川。心に残したい里川の記録集」のキャッチコピーもあって購入した。ここしばらくは釣行できていなかったが、札幌近郊の溪流で山女魚やオショロコマを釣るのは好きだったし、夏に帰省した時には故郷の町を流れる芦川でアマゴを釣ることもあった。早速、ページをめくると著者の芦澤一洋氏はアウトドア分野の第一人者で、なんと私の故郷の隣町出身で、おそらく高校の先輩でもあることが分かった。さらに、「大盆地風景の桃源郷 芦川【山梨県】」の章もあり、早速ここから懐かしさを噛みしめながら読み始めた。

そうこうしているうちに、食べられなかった父がラーメンを所望し、有難いことに老健はこれに答えてラーメンを作ってくれ、三分の一程を父は食べたとの電話があった。食べられるようになったと喜んだのも束の間、その3日後、父は102歳で旅立っていった。人口の割に県内の新規感染者が多いことも考慮して家族葬で父を送って札幌に戻った。件の本は札幌に戻った後の通勤の地下鉄の中で読み続けたところ、「山女村の風と山女魚と 跡津川【岐阜県】」の章以下この詩を見出し、涙が止まらなくなって困った。

風になって---

たとえ わたしが死んでも わたしは 死なない  
わたしは自由な風になって 佐保子の美しい髪を  
なで  
哲也のテニスの球と一緒に走り 登さんの自転車の  
あとを追う  
お父さんとお母さんの間にすわって 子どもにか  
えって あまえる  
大好きな田中さんちへは 毎日行って 桜の葉を  
ゆすったり  
白いカーテンの間からしのび込み コンチワ  
いって 弘子さんをおどろかす  
たとえ わたしが死んでも わたしは 死なない  
愛する人たちのまわりを いつも いつも やさ  
しく 吹いていた

芦澤氏によると、この風になった方は、会津若松に住んでいた坂井恭子さんという故人で、1986年の秋に喫茶店「銀座ウエスト」の「名曲の葉」の中にこの詩を見出したとのことであった。釣りの本でこのような詩に出合った衝撃は大きかった。とはいえ、この本はハウツーや釣果を誇るような軽薄な物ではなく、自然と文化の深い洞察に貫かれている。しかし、父を送った後の不安定な心にいきなり飛び込んできたこの詩は、これは偶然なのかとの問いを舞い上げながらも、やさしく私の心に吹き続けている。

芦澤一洋『山女魚里の釣り』、ヤマケイ文庫、山と溪谷社、2017年、p201